

「第10回世界湖沼会議」報告

研究第一部 主任研究員 辻 光浩

1. はじめに

2003年6月22日から26日にかけて、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ市内のミシガン湖畔に近いデ・ポール大学において、第10回世界湖沼会議が開催されました。

世界湖沼会議は、湖沼を取り巻く環境問題について、研究者・行政・市民の三者が一堂に会して、情報や経験を交換し合う国際会議です。第1回会議が、昭和59年（1984年）に、滋賀県において開催されて以来、2年ごとに世界各地で開催されています。

今回の会議は、「大湖沼への地球規模の脅威—不安定で予測不可能な環境下での湖沼管理—」をテーマに、世界36カ国から700百人余りが参加し、48の分科会において600以上の発表が行われるなど、大変活発な議論や意見交換が行われました。

ここでは、会議の概要を報告します。



2. 会議の特徴

今回の会議は、五大湖国際研究機関（IAGLR）と（財）国際湖沼環境委員会（ILEC）の共催により開催されました。また、IAGLRの第48回年次大会と兼ねた会議であったため、研究成果発表の場としての性格が強いものでした。このため、北米における湖沼研究の充実ぶりとその層の厚さを実感することができました。

3. 会議の内容

数多くの研究成果発表の中で、特に印象的であった2点を紹介します。

①流域管理のあり方（制度的枠組みの整備、実践的な取り組みの必要性）

五大湖地域においては、20世紀前半から商工業が発展してきたこと、農業や畜産業が大規模に行われてきたことから、重大な環境汚染が発生していました。また、水利用に関する多くの問題が発生していました。

現在は、1909年にアメリカ・カナダの両政府間の条例に基づいて設置された国際共同委員会（IJC）が、

五大湖を含む両国の国境域にある湖沼および河川水質・取水はもとより、様々な面での共同管理と利害調整、研究調査の支援・促進にあたっているとの報告がありました。

環境に関する課題を解決するため、制度的枠組みが整えられ、実践的な取り組みが進められていることは、我が国における流域管理のあり方の参考になりました。

特に次の視点の取り組みが重要と感じました。

◇科学的な研究の充実・促進とその成果を市民と共有化すること。

◇湖沼保全、環境保全に関わる市民、NPO活動の支援と連携の強化

②国際的に連携した取り組みの重要性

現在、世界の湖沼、特に先進国の湖沼の課題は次のとおりであることを

再認識しました。これらを解決するには、より一層、国際的に連携した取り組みを進めていくことが重要と感じました。



◇富栄養化、化学物質対策等のポイント・ソース対策は、相当の成果を上げてきている。一方で、都市排水（アーバン・ランオフ）や大気媒介による汚染、いわゆるノン・ポイント・ソースによる汚染対策が世界的な共通課題であること。

◇近年、コンピューター産業や難燃性素材から出る化学物質（臭化物）が新たな汚染源となってきたこと。

◇PCBやDDTなど先進国では20年以上前に使用禁止となった有害物質が、底泥等に蓄積され検出されていること。

◇外来種とくに固有魚種に被害を与える外来魚・貝類問題が顕在化していること。

4. おわりに

次回（第11回）会議は、2005年に、ケニアのナイロビで開催されます。

今回会議の成果を踏まえ、国際的に連携した取り組みが一層進み、湖沼管理における諸課題が早期に解決することを期待します。